

出来事ファイル (No.23-4)



明日につなげるコンサート PRAY FROM KOBE 2023

3月11日(土)12時から、コロナウイルスの影響で3年の間、休演を余儀なくされていた「明日につなげるコンサート」が、元町商店街1番街入り口を会場に開かれた。当日は、天候に恵まれ定刻に開演、それぞれ特色のある11のグループが出演。さわやかな音色、懐かしい歌、思い出の曲などに、買い物に訪れた人たちが足を止め、澄み渡った音色に聞き入っていた。

出演団体は①神戸室内合唱団(指揮:半田梓・根津昌彦)、②ICEK(指揮:山口英樹・ピアノ:堂本菜々美)、③神戸

大学混声合唱団アポロン(指揮:高見佳奈)、④北欧アンサンブルNorraRöster ⑤合唱団ボイスフィールド(指揮:天野裕介・ピアノ山内愛)、⑥Female Ensemble 和奏-WAKANA-(指揮:古賀千紘・黒田聖奈・ピアノ:京極佳奈)⑦混声合唱団Neue Kammer Chor(指揮:阪上公博・ピアノ:前田裕佳) ⑧混声合唱団Parsley(指揮:橋本淳・ピアノ:橋本晃子)⑨合唱団天上花火(指揮:根津昌彦・ピアノ:鹿島有紀子)⑩関西大学中等部高等部合唱部(指揮:林誠浩)⑪夙川エンジェルコール(指揮:根津嘉子・ピアノ:由利洋子)エンディング(指揮:斉田好男・ピアノ:由利洋子・前田裕佳)

もともちハーバークリーン作戦

もともちハーバー懇談会では3月1日(水)正午12時から、地域一帯のクリーン作戦を実施した。エスタシオン・デ・神戸9名、ネットヨタ兵庫株式会社から22名の方々の参加がありました。



エスタシオン・デ・神戸のみなさん



ネットヨタ株式会社のみなさん

読者プレゼント

観覧ご希望の方は、展覧会名と住所・氏名・年齢・本紙へのひと言を添え、本紙編集部までハガキでお申込み下さい。先着順で2名の方にペア招待券をお送りします。

生誕100年 回顧展 石本 正

没後のアトリエで新たに見つかった素描や絶筆となった未完の「舞妓」も展示し、生涯、地位や名声を求めることなく、最後の瞬間まで絵画一筋に生きた石本の生涯と創作の原点に迫ります。



《舞妓(未完)》2015年 浜田市立石正美術館蔵

会場:京都市京セラ美術館 本館 北回廊2階 ☎075-771-4334 会期:4月4日(火) ~5月28日(日)

幕末土佐の天才絵師 絵金展

謎の天才絵師とも呼ばれる土佐の絵師・金蔵は、幕末から明治初期にかけて数多くの芝居絵屏風などを残し「絵金さん」の愛称で、地元高知で長年親しまれてきました。今も変わらず夏祭りの数日間、高知各所の神社等で飾られ、闇の中に蠟燭の灯りで浮かび上がるおどろおどろしい芝居の場面は、見るものに鮮烈な印象を残しています。



伊達鏡阿国戯場 累 二曲一隻屏風・紙本彩色 香南市赤岡町本町二区 ※後期展示(5/23~6/18)

会場:あべのハルカス美術館 ☎06-4399-9050 会期:4月22日(土) ~6月18日(日)

神戸元町 商店街 楽市楽座 情報 4月

こうべまちづくり会館ギャラリー(無料) TEL.361-4523

4月13日(木)~4月18日(火)第29回いくた15人展 4月21日(金)~4月24日(月)兵庫倶楽部写真友会写真展 4月27日(木)~5月 2日(火)元町の芸術家たち展

元町映画館(有料) TEL.366-2636

3月25日(土)~4月 7日(金) 『指先から宇宙まで 素晴らしき短編アニメーションの世界』 4月 1日(土)~4月 7日(金)『彼岸のふたり』『マルケター・ラザロヴァー』 4月 1日(土)~4月14日(金) 『明日香に生きる』『マイヤ・インラ 旅から生まれるデザイン』 4月 8日(土)~4月14日(金)『アキレスは亀』『ワタンの中の彼女』 4月 8日(土)~4月21日(金)『REVOLUTION+1』『ノベンパー』 4月15日(土)~4月21日(金) 『浦安魚市場のこと』『ミュージスは溺れない』『優しさのすべて』 4月22日(土)~5月 5日(金) 『目の見えない白鳥さん、アートを見にいこう』『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』【予定は変更になる場合がございます。】



栄町通まちづくり委員会は、3月10日(金)10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、(株)イーエスプランニング)西晶子、(株)KKテクノ)久保友良寧・吉田零、(こうべまちづくり会館)木原正剛、(神明倉庫)大西登紀子・流尚久、(一産業)宗實和弘、(トマト銀行)岡村恭輔、(兵庫県信用組合)井上博仁・石垣朋子・山之井純子、(広島銀行)曾我部真介、(みなと元町サポート隊)山口紀子、(新光明飾)藤田直之・西村友博・大森貴美子、(佐田野不動産)佐田野宏之以上、17名のみなさんでした。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。



みなと元町 TOWN NEWS



発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

元町に私の日常があった2023年3月

合資会社ゼンクリエイト 根津 昌彦

元町通6丁目の某ビルの屋上に昨年7月末から90cm四方のプランターを設置し、元町のまちづくりを通じて知り合った仲間「モトロクそばだけ」という野菜づくり同好会をスタートさせました。50歳を目前にした頃から緑を育てることに目覚め、52歳の誕生日にそばだけ提唱者に出会って、今度は野菜づくりもやってみたく心が動き、畑までやり始めました。

夏野菜のミニトマトはなかなか難しく、苗植えの時期が遅かったこともあり、みんなで食べるほどの量が育ちませんでした。悔しさを抱えて、なんとか冬野菜こそはと、解体が進む旧ホテルシェレナのビルを眺めながら、日々水やりにいそしんだもののなかなかの難産でした。ビルの屋上は土が凍るほど寒く生育には非常に厳しい環境なのですが、知恵を絞ってサポートしてくれた二人のプロのおかげで頑張ってくれた野菜たち。小カブ、ミニラディッシュ、ミニ大根、ミニ白菜、水菜がバケツ1杯分収穫できたので、一緒に育ててるメンバーの事務所、待ちに待った収穫祭を3月6日に開催。メルカロード宇治川で鶏肉を調達し、鍋を囲み語りながら水炊きで青い葉と白い根をシンプルに楽しみました。



そばだけで作ったミニ自家製

今年の3.11、東日本大震災からちょうど12年たった元町には、歌声で被災地にエールを送る街頭コンサートが4年ぶりに復活できた日となりました。Pray From Kobe 2023 明日につなげるコンサート・元町街頭コンサートには、兵庫県下を中心とした11の合唱団が元町一番街のユニクロ前の特設ステージでレパトリーを披露しました。歌い手の年齢層も多種多様で、下は10代の少女少女合唱団から上は80代メンバーを擁する社会人合唱団まで、2020年3月に

出演を希望していた多くの団体が、この舞台を心待ちにしてくれて、いずれの合唱団もほんとに素敵な演奏ばかりでした。正午から始めたコンサートは、演奏披露と被災地の合唱活動支援のための募金活動を交互に行ったのですが、たくさんの方が歌声に足を止め募金箱に浄財を入れていただき、なんと23万円もの志が集まりました。主催である兵庫県合唱連盟より宮城県合唱連盟に対して、全額を寄付させていただきました。コンサート実行委員長として心より感謝申し上げます。



多くの来街者の方々が熱心に演奏を聴いてくださった合唱演奏

2023年3月16日の夜は、「JR神戸駅・ハーバーロード周辺のまちづくり構想素案」に対するアンケート調査集計結果の報告会兼意見交換会を、こうべまちづくり会館2階のホールで開催しました。2021年7月からもともちハーバー懇談会、ハーバーロード・ワーキングで検討を重ねてきた元町通7丁目、栄町通7丁目を中心としたエリアのまちづくり構想に対して、既報のアンケート結果に加えて、95名の方からお寄せいただいた様々なご意見をご紹介します。当日の参加者の皆さんからは、これからのまちづくりにどのようなことが必要か、また大切にしていかなければならないかというお考えを披露いただきました。

今後もハーバーロード・ワーキングは毎月第1金曜日の午後4時から、こうべまちづくり会館3階で会合を継続してまいります。令和5年度は、まちづくり構想案で提案したことを具現化していく「試みの年」としていく考えですので、一緒に汗をかいてやろうという思いの方は、ぜひともワーキングに参加いただければと願っています。

神戸市内には旧神戸市住宅供給公社が開発・分譲した住宅団地がたくさんありま

すが、その多くが築30年を超えており、建物の老いと人の老いという「2つの老い」といった問題に今まさに直面しています。日々流れているコマーシャルでは賃貸住宅団地には明るい未来が待っているように感じますが、分譲団地はというと、役員のみならず手不足や修繕積立金値上げに対する不安等、団地暮らしを続けていくことに未来がないのではという思いに日々悩んでいる方も多くいらっしゃいます。ワンオーナーの賃貸住宅と違い、分譲集合住宅は戸数の数だけ所有者がいて、管理組合総会の決議で物事を決めていかないといけない宿命にあります。自主管理をしている団地も少なくなく、将来計画を考えようにも何から手を付けていいかがわからない。そんな不安を抱えている団地所有者に対して、明るい未来を提示できるようなサポートしたいという実務者が集まって、昨年4月に「こうべ団地みらい創生機構」という組織を立ち上げました。

3月26日の午後、こうべまちづくり会館3階で「コミュニティ継続と建物寿命へサビない団地の魅力とは」と題した第2回フォーラムを開催したところ、写真の通り大盛況でした。995戸の住宅団地で団地再生方針を決定できた事例の紹介や参加者によるワークショップ形式での意見交換を行い、こうしたマンション、団地同士の情報交換の有効性を実感した会となりました。



7つのテーブルで行った熱のこもったワークショップ

いまさらながらではありますが、2023年3月の私の日常はいつものように元町にありました。

海という名の本屋が消えた (113)

平野義昌

西村旅館(5)

戦後「西村旅館」は再開しなかった。『西村旅館年譜』は1951(昭和26)年以後の記事類を添付する。2月4日「新大阪」がコラム「変わった人たち」で「元西村旅館持主」の生活を紹介する。年中ルパンカを着用、文化芸術もスポーツも女人顔負け、焼け跡にレンガを積み上げて住まいを手作り。また、友人と「へちまくらぶ(補註1)を結成し、講演会を開催し、学者のための「全日本文化協会」(講演料収入分配)の世話など、その文化活動などを伝える。註1

同月吉川英治「新平家今昔行」(『週刊朝日』2月25日号)が貫一に言及。吉川は詩人・富田砕花に連れられ貫一を訪問した。〈……ガード下の露店街を見て、急に海岸通りの方へ曲がる。むかしの上海租界にでもあったような門のベルを押す。西村貫一の家だという。旅館時代に泊った縁を思いおこす。ガーデンをこえ、歓喜で建てたバラックだと主の自慢する洋館にはいりこむ。貫一氏カンカンと放談放笑。神戸の名物インテリといわれる所以を五分間で客にうなづかせてしまう。〉註1

貫一は小泉八雲やマルクスの書簡、美術品を見せた。吉川曰く、「神戸の一奇珍にちがいない」(註1)。八雲書簡は稿を改める。

53(昭和28)年2月14日「神戸新聞」記事。木村毅がへちまクラブ訪問。当時木村は東京都参与。「開国百年記念事業」委員も勤め、その記念事業のため長崎、新潟、函館などゆかりの都市をまわる。どこも協力的なのに神戸だけが反響なく、貫一に相談。註1

54(昭和29)年1月18日、へちまクラブで歌人・柳原白蓮(1885～1967年、本名宮崎燁子[あきこ])講演。短歌は思いのままの言葉で表現せよ、言葉には魂がある、歌には魂がこもっていて何年も何百年も生きつづけるものと信じてほしい、と語る。註1

『年譜』最後の記事は、58(昭和33)年1月9日「神戸新聞」連載開始の柳田國男「故郷七十年」。1887(明治20)年松岡國男(旧姓)は神東郡田原村(現在神崎郡福崎町)から兄・通泰(井上家に養子入り、帝国大学医科大学[現・東京大学医学部]在学中)に伴われ上京。人力車で神戸まで来て、船で横浜に向かう。乗り換え地神戸の風景。〈車はやがて兵庫の町に入り、さびれゆく町並を過ぎ、神戸の港に面した当時いちばんといわれた――西村屋だったろうか――宿屋に泊った。いまでもそのたたずまいがくつきりと目に浮ぶようだが、よくどこの港町にもあるようなふつうの手摺つきの表二階の家で縁側も雨戸もかっこうの宿屋だった。海岸は草土堤になっており、石垣は築いてあったが、上の方は芝生で、草も生えていたように記憶する。〉註1

この『年譜』出版が実現したのは1980(昭和55)年のこと。1960(昭和35)年貫一死後、長男雅貫と次男雅司が受け継いだのが、彼らもあいついで亡くなる。貫一は原稿の最後に「子孫これを出版せよ」と遺言。妻マサが役目を果たした。序文は親交深い竹中郁と木村毅、貫一の編集作業を補佐した中島涼。中島が貫一の編集・執筆方針を語る。

〈「記憶は言うに及ばず文献も記録も消失する運命にある。だから今ある内に纏めて後世に残る様にせねばならぬ」との強い信念から西村さんは独特の畏業とも言える「ゴルフのビビリオグラ

フィ」(引用者註『世界ゴルフ蔵書目録』)の編纂に長年取り組み原稿が完成した時は不幸にして日支事変で国中が騒がしくなっていました。〉註1

40(昭和15)年に『世界ゴルフ蔵書目録』がほぼ完成し、中島は『年譜』編集のため図書館通い。明治初期の新聞から「西村」宿泊者拾い出しに取り組んだ。〈「中島君、何事も曖昧であってはいけないよ。殊に……らしいの詞を使う人は駄目だ。調べが充分でないから『らしい』としか言えないのだ。そんな表現をする人の本なんか信用性がないし、つまらなくて読む値打などなく役に立たないよ」と機会ある毎に私達をたしなめておられました。〉註1

時計を巻き戻す。45(昭和20)年3月17日の空襲で「西村」焼失。庭の離れ座敷(書斎と茶室)は焼夷弾に備え、外側にはセメントを塗りこみ補強。宿帳など文書類と稀観書は油紙で包み、ブリキ缶に入れ、井戸に収納し、土嚢を積み上げた。資料と書籍が残った。

貫一は町内住民・会社と「百人会」を結成し、労力を提供しあい、物資を助け合う。食糧難が落ち着くと、「頭の教育、精神的な相互扶助」(註2)を企画。焼け跡に大小棟の家を建て、庭の中央にレンガを敷き、へちま棚を設け、大きな手製の机を囲んで藤椅子を並べた(写真)。ここに友人たちが集まり雑談。「いずれもが何か身につけている人たちの集りで、話しばなし、聞き流しのままでは惜しい。一つ銘々が話題を選び、誰かが毎週ひとくさり話をしよう」(註3)となった。46(昭和21)年「へちまクラブ」創立。〈主旨 日本再建の為めお互いに物心両面を心から助け合って世の為め国の為めに尽く度いと思ひます／事業 右の主旨により各種の会合講演会等を催します〉註4

戦前貫一は「西村」に名士を招いてたびたび講演会を開催していた。長女・春子の記憶、3歳くらいの時、なぜ手が動くのか、と問うた。貫一は説明に困り、専門家に尋ねまわる。これが講演会のきっかけだった。春子は貫一が大坂の商人学者・木村兼葭堂(けんかどう、1736～1802年)(補註2)を理想としたことも思い出す。〈旅館をしても主として人まかせ、母まかせ。自分は奥の書斎か、六甲の家で趣味三昧に浸り乍ら、これと思う人を、一筋縄でいかぬ人を、人間の最高をゆく人を、かくれた何物かをもちつ人を、御挨拶と称して客室に入り、人間探索をしていたようなものである。どうも思うに、父の御道楽の大事な棚の一番上は自分すら手の届かぬ水準の高い形而上の物をならべ、次々と一番興味深々の人間をならべ、その下に好きな美術品をおいて悦に入っている……というようだ。〉註5

クラブの日記。〈昭和二十一年一月二十三日 クラブハウス建築着手／五月四日 開会式を行う〉註4

クラブ名命名は遺伝学者・松浦一(1900～1990年)。「へちまクラブへ寄する」の文があるが、書き手不明。

〈この日頃人々餓鬼の如くわれひとの見さかいなく、喰いものを奪いあう、まことに地獄絵に似しあさましき現し世に、なんのこれしき、なんのへちまとばかり強ものども、相つどいてへちまクラブを設立せりとときき、よろこびに堪えず一書を呈して祝辞とす。／願わくは「心にはへちまの皮を絶やすなよ、うき世の垢をあらわんがため」の古歌の如く、この醜き浮き世の垢にまみれず、

へちまの棚の夕すずみ、心もさやなゆたけ会に育て給え。世の俗人にはへちまの美味ならず、花美しからねば「草刈のそしるをきけばへちまかな」とて世の草刈どもには、へちまクラブのへちまの滋味の奥ゆかしさ知り難からんも、やがては草刈の心に夏の月も宿るべし。さるほどにまた願わくば衆愚に心の糧を与ふる会に大成せしめ給えかし。へちま散人 敬白)註4

「心にはへちま～」は安土桃山時代の禅僧・英甫永雄(えいほ・えいゆう)の狂歌。「草刈の～」は横井也有(やゆう、尾張藩武士・俳人)の俳句。へちまは役に立たないと言われるが、心身の垢を落とす。

会員名簿。第一回会員(1946年7月現在)、岸田國士、住田正一、富田砕花、長谷川如是閑、木村毅、牧野富太郎ら本稿で登場した人物他90名。第二回会員(47年5月)49名、渋沢敬三、佐野学、柳田國男、森於菟、宮武外骨ら。第三回(48年10月)50名、辰野隆、湯川秀樹、大佛次郎、福原麟太郎、長与善郎、山田耕筰、安倍能成、竹中郁ら。註6

初年度の主な催し。吉田文五郎の文楽。講演は遺伝学者・木原均、児童文学者・教育者の久留島武彦、禅僧・山田無門ら。県知事や市長、警察幹部との座談会、税務や身近な医学講座、英語講習会の他、遠出しての鰯網、芋掘り、桂離宮見学、さらに「廉売会」も開催。英語講習は初め無料と告知するも参加者2名のみで中止。有料にすると50名になった。年々催しは増え、ユネスコ協力会や先述の全日本文化協会、災害募金などの社会事業も。また落語会、音楽会、ヌード写真撮影会など硬軟取り混ぜた会を開いた。

49(昭和24)年1月雑誌「金曜」創刊(補註3)。会員が寄稿、文庫サイズ。次回詳しく

註1 西村貫一『西村旅館年譜』自費出版 1980年
註2 芦田章「神戸奇人伝 西村貫一」(『歴史と神戸58』神戸史学会1973年)

註3 増田五良「西村貫一君と私」『日本のゴルフ史 復刻版』(雄松堂書店1976年)付録冊子

註4 「へちま倶楽部日誌抜萃」Web近代書誌・近代画像データベース(大阪大学附属図書館小野文庫)

http://school.nijl.ac.jp/kindai/OSON/OSON-00056.html#1

註5 『へちまと十年』へちまクラブ・山本吉之助編・刊1956年。写真も同書より。

註6 「へちま倶楽部会則及名簿」註4と同サイト。http://school.nijl.ac.jp/kindai/OSON/OSON-00342.html#1

補註1 表記不統一。本稿は「クラブ」とし、引用文・書名は書き手に従う。

補註2 通称坪井屋吉右衛門。酒造業を営み、和漢学、博物学、蘭学を学ぶ。書籍、美術品など蒐集品を公開し、知識人・文人と交流。

補註3 ブログ「神保町系オタオタ日記」に紹介記事あり。https://jyunku.hatenablog.com/entry/2020/08/27/200712

引用文は適宜新字・新かなに直した。



みなとMOIOMACHケンチクさんぽ vol.21

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部

兵庫地域会 地域まちづくり委員会

元町商店街の誕生

元町商店街は神戸市の北は再度山、南は神戸港、西はJ R神戸駅、東はJ R元町駅の間に位置している約1.2kmの商店街です。約150年の歴史があり「元からあった町」「神戸の元になった町」とのことで「元町」と呼ばれています。通りは平安時代に整備された山陽道で京都と下関を結ぶ西国街道と呼ばれて、大名行列も通ったそうです。

田畑の中を通るさびしい西国街道でありましたが、江戸時代末期には神戸村、二つ茶屋村、走水村という3つの村があり、220戸が軒を連ね、街道沿いにいろいろなお店が並んで賑わっていたようです。この賑わいが時



災害

1938年(昭和13年)7月3日から7月5日にかけて、神戸市及び阪神地区で阪神大水害が発生しました。激しい雨は4日夕刻に一時収まりましたが、5日午前1時頃から5日13時頃まで大豪雨となりました。この3日間で降水量が最も多い時には60.8mm/h、総降水量は六甲山で616mm、市街地の神戸測候所(後の神戸海洋気象台→神戸地方気象台)でも461.8mmに達し、阪神間の広い地域で400mmを超える大雨となりました。神戸は山と海が近く六甲山から急な勾配で海に流れる川が多いため、元町通りもその影響で膝下まで浸かるほど水が溢れていました。



大水害からの復興後、1939年(昭和14年)第二次世界大戦が勃発し、大戦末期の1945年(昭和20年)3月17日には神戸市の西半分が、更に6月5日には東半分の地域が無差別攻撃による爆撃で壊滅しました。その当時の写真には人々が消火ホース

代を経て商店街へと発展していきました。神戸が開港(「大輪田泊」その後「兵庫の津」と呼ばれ、慶応3年(1868年)に神戸港として開港)した時から外国人居留地ができ、その周辺に店が集まってきました。西国街道沿いにも人が集まり発展し、明治の初めに大手、札場、城下、八幡町などの町名がつけられました。明治5年(1874)5月20日にその一帯が兵庫県令・神田孝平の命により「元町通」と改称され、この日が神戸元町商店街の誕生とされています。

明治16年(1883)頃から大正時代にかけて商店街あげての誓文払い(バーゲン)がおこなわれ11月の中旬の1週間、どの店も入口が隠れるほどの商品を積み上げ、定価の4～5割引で販売し大いに賑わったそうです。



をもち火災の発生した商店に放水している状況が写っています。

人々の協力による消火活動にも関わらず多くの商店、住宅が焼け落ちました。

その後、1995年(平成7年)に淡路島北部沖の明石海峡を震源とした兵庫県南部地震が発生し、近畿圏の広域が被害を受けました。震源に近い神戸市中央区、兵庫区、長田区、須磨区は被害が甚大でした。

死者が6434人、住宅被害が約64万棟の巨大災害に。2月14日、政府は「阪神・淡路大震災」と呼称しました。

元町商店街も一部の店舗は全壊し、アーケードは倒壊しなかったものの修理で数億円に上る被害を受けたそうです。交通機関が不通となったため、人通りも少なく、商店街は人々に元気が出るように、遅くまで灯りをつけていたそうです。

水害、戦後の復興と同様に、商店が震災から立ち直るのは早く、震災1週間後頃から再開し始め、2週間後には半分以上の店舗が開店。プロパンガスを使ってうどんを作り100円で振るまったり、衣料品を半額以下で販売するなど、被災者の生活を応援するための破

人が集まり、町ができてくると、建築も時代と共にその土地の環境と生活スタイルに合わせて形が造られ、在り方も変化していくのです。しかし、建築が人間にとって安全で安心して生活でき、心がふれあい、安らぎを覚えられるものでなければならないということとは変えてはならないと常日頃考えています。少し前までの元町は、華美ではなく、重厚で、それでいて周辺の環境にとけ込み、ふと心に残る、安穩とした通りであったと思っています。まだまだ、その雰囲気は残っているものの、現在では時代の流れとはいうものの、人の目を引くため?の作りのお店ができており、昔の記憶を思い抱いている私には少し残念な気持ちで通りを過ぎていきます。



格値のバーゲンが続いたそうです。それを知り、元町商店街の人々の市民に向けた心配りのエールに感謝し、奉仕の心のある町と人々であることに感動いたしました。

建築は、大雨、地震等の自然災害を受けると、その度に建物を造る為の「構造基準」や「消防基準」が変わっています。元町界隈も木造の建物が多かった時代から石造りの建物、鉄筋コンクリート造の建物へと変わっています。1981年には「新耐震基準」により「許容応力度計算」「保有水平耐力計算」という構造計算方法が取り入れられ、壁、柱がバランスよく配置された設計が求められるようになり地震に強い建物になりました。それでも、1995年の阪神・淡路大震災では建物が倒壊することは少なくなったものの被害を受けた建物も多くありました。人間の力に影響されない大自然の怖さを知りました。

建築は人間が自然と共生しながら、発展していくことを決して忘れてはならない事だと思っています。

出典 参考文献：「写真集 神戸100年(神戸市)」「むかしの神戸(神戸新聞総合出版センター)」「月刊神戸っ子(KOBECCO)」等



戎 孝之(えびす たかし)
株式会社黒田建築設計事務所 勤務
／一級建築士／JIA会員